



22 百福之図 藤井松林 一幅

明治二十二年(一八八九)
絹本着色
本紙二四・七×二四四・二

お多福とは、おでこ頬がふくれた丸顔の女性で、お福、お亀なども呼ばれる。福を呼ぶ縁起の良い面相として、現在でも西の市の大熊手にそのお面が飾られる。庶民の間に福神信仰が広まる近世以降、画題として好んで取り上げられた。そして「魚尽くし」や「貝尽くし」といった尽くしものの流行の影響もあり、江戸後期頃から明治期にかけて大勢のお多福を描き込む「百福図」が少なからず制作されたよう、雅熙筆「百福図」(ブライスコレクション)などの先行例が知られる。

藤井松林(一八二四〜九四)は、円山派の中島来章に学んだ福山の画家である。大正二年発行の『松林畫集』によると、明治二十二年に松林は宮内省の命を受けて上京し、本図及び「鯉魚游泳之図」(当館所蔵)を制作・献上したという。

本図には、子供から老人まで様々な姿態のお多福が描かれており、その数は計百四十八人にもものぼるが、その一人一人の衣装文様など細部にまで画家の注意が払われている。応挙の「雪松図屏風」(三井記念美術館蔵)を彷彿とさせる松の図を、画面左端のお多福に描かせているところに、円山派としての松林の自負が見え隠れする。なお松林は手元に残すためか、本図とまったく同図様の「百福図」(ふくやま美術館寄託)をもう一点制作している。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

福やぶござれ ― 寿ぎの美・新春に集う

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 42

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年一月六日発行

©2007, The Museum of the Imperial Collections